

第18回 夢アイデアまちづくりに関する提案

タイトル：「通りを考えることから始めてみよう」

1. まちづくりの始まり、まちづくりのベースをつくる

2. 通りとは、町（コミュニティ）とは

3. 通りの名前を考えること = 町を知ること、町をイメージすること

- ・公募の方法

4. 新しいまちづくりに向けて

- ・通りの名前からイメージされるまちづくりプロジェクト

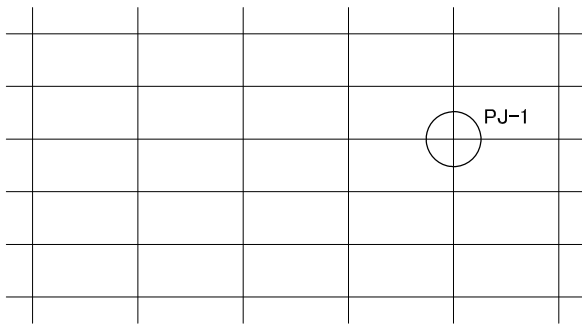
- ・まちづくり=ひとづくり

- ・まちづくりのベース=地図づくり

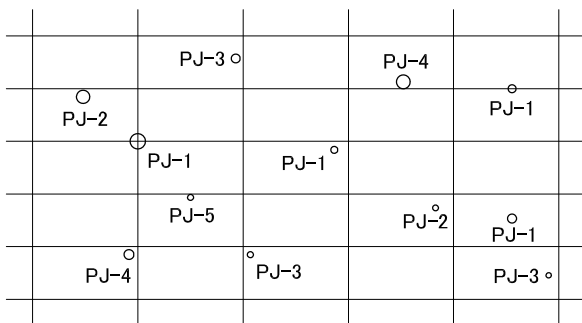
5. おわりに

1. まちづくりの始まり、まちづくりのベースをつくる

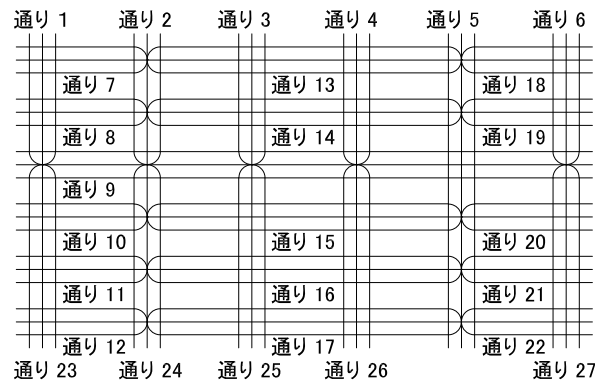
まちづくりの一環として大きなイベントを実現したとしても、それは町の1部の人取り組み、参加していることだけなのかもしれない（地図1）。唐突に大きなプロジェクトを実行するのではなく、多くの人や団体（企業）が参加し、アイデアを出し合い、小さな現実的なプロジェクトを作り出し実行するというのが理想ではないだろうか。一過性のものでなく、長期にわたって定期的にプロジェクトが生まれ、町が程よく変化していく（地図2）。大きな都市計画ではなく、小さな建築が良い町をつくっていくように。



地図1、大きなまちづくりプロジェクトのイメージ



地図2、小さなまちづくりプロジェクトのイメージ

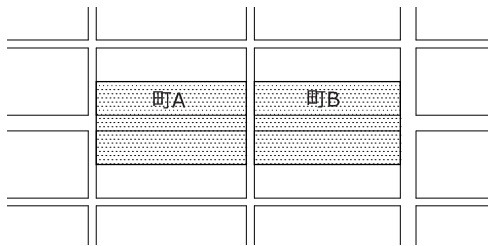


地図3、通りを1つ1つ選定し、名前を付ける

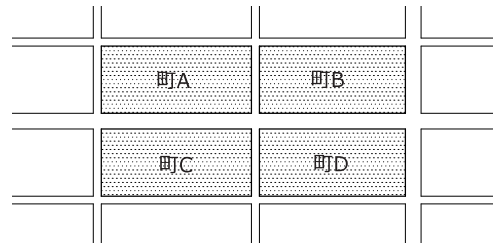
では、どうすれば多くの人や団体が興味をもちプロジェクトに参加してくれるのか。また、どうすれば参加した人たちがプロジェクトのイメージを共有できるのか。地図2のイメージではプロジェクトが町に拡散している。これを実現するには町の小さな部分が何らかのポテンシャル、個性をもっているということが肝要になるだろう。言い換えれば町を構成する街路、通りという部分に個性的なものが必要であるということである。まちづくりの取り掛かりとして、通りが持っているポテンシャルや個性を調べ分かりやすくすること、それがまちづくりのための1つのベースにならないだろうか。そのベースを基にまちづくりプロジェクトが企画されるというように。ここに1つのアイデアを提案する。それは町の通り1つひとつの名前をみんなで考えることである。（地図3）その過程において通りのポテンシャルや個性が明らかになっていこう。以下、その意味、方法、予想される効果について考えてみたい。

2. 通りとは、町（コミュニティ）とは

通りは1度出来てしまえば長くそこに残るものである。中世以前のものから近世、近代、現代に敷かれたものが重なっていく。そしてかつてはその1つひとつの通りに町名や名前が付けられていた（地図4）。戦後、町割りは変更され大きな通りを除いて、通りに名前が付けられることはなくなった。区画は通りの中心を境界線に面的に分割され、住所は何丁目何番という日本特有のものになった（地図5）。近世の絵図や古い地図を見ると通りには町名があり、その名前には意味があるように見える。例えば、魚町や桶屋町など名前だけでそこに魚屋や桶職人が集まっているように感じてしまう。町でない場合も〇〇道、〇〇小路などの名前が必ず付いている。



地図4 戦前の区画



地図5 現在の区画

元々小さなコミュニティは通りを中心に成り立っていたのであろう。現在では、ほとんどの通りが町名どころか名前すら無い状態にある。名も無く、景観上の個性も無いのでは多くの通りが同じように見えても仕方がない。これから私たちがまちづくりのベースとなるべく、通り1つひとつの名前を考えていく。新しい名前は古くからある町名とは違い、新しい通りのイメージを時間をかけて育てていくことになる。新しいコミュニティと共に。

3. 通りの名前を考えること = 町を知ること、町をイメージすること

住む人が考え、イメージし、通りに名前をつける。それはその人が改めて町を知るきっかけにもなるであろうし、まちづくりに参加し始めたことを意味する。大きなアートや音楽のイベントとは違う、今後そうしたイベントを支えるであろうベースとなるプロジェクトである。

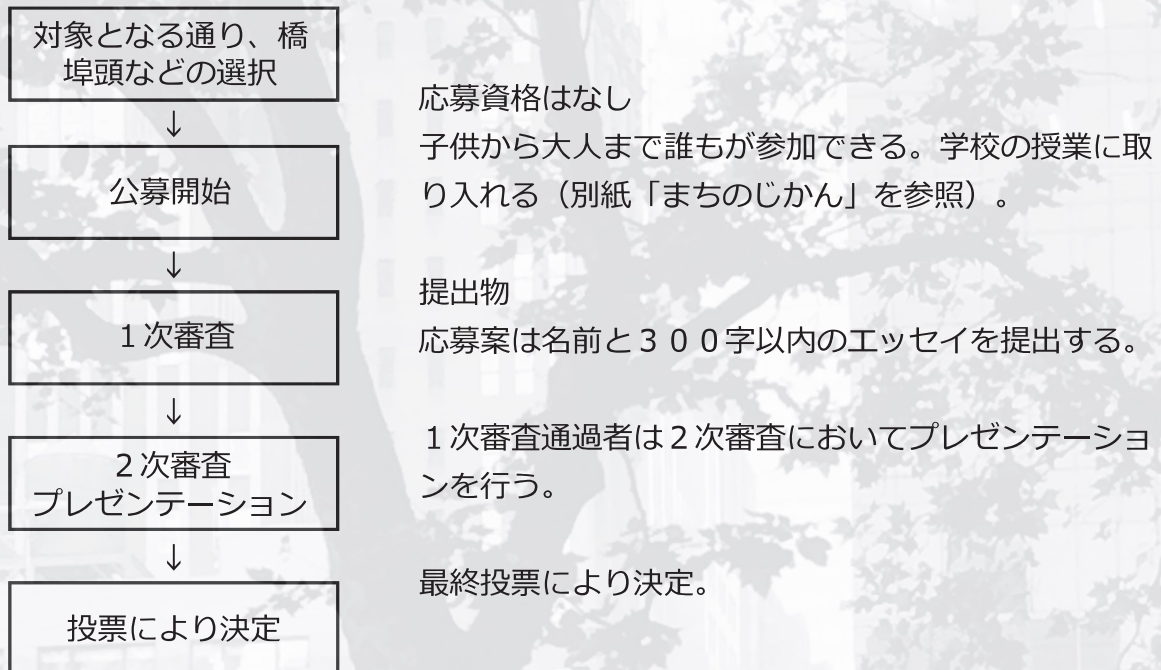
名付けは公募によるのが有効ではないかと考えている。名前が段階を経て絞り込まれる過程でその通りについての情報やイメージが人々に共有されていくからである。それはとても大事なことであり、まちづくりプロジェクトを企画する際にも大きな意味を持つ。

最近では岡山市で5本の通りの名前が公募された。その他、神戸市や江東区では道路の愛称を公認するというものがある。新しい橋の名前の公募はより一般的である。応募数は多く、人が興味をもって参加しやすい企画だと言える。

公募の方法

市町村単位を考えている。10本程度の通りを選定し、2カ月毎に公募する。一月目で公募し、二月目で決定する。これを全ての通りに名前が付くまであるいは十分といえるまで繰り返す。応募案の中から可能性のあるものを選び出し、最終的に投票で決定する。

特に小中高の子供たちが参加することには大きな意味があるだろう。例えば、子供たちが町の中で経験していくことは通りの名前によってより強く印象に残っていく。「〇〇通りと〇〇小路のあそこで、、、」といったように。



通りのイメージづくり、名付けに影響される企業は少なからずあるはずだ。公募にかかる費用はそうした企業からの協賛を考えている。

通りの名前を1つひとつ付けていくということは言葉以上に大変な作業である。失敗もあれば修正も必要だろう。しかし地道な作業の積み重ねがいずれ大きな結果を生むはずだ。思いを込めた通りの名前とそのイメージは、変化しながらも長きにわたって受け継がれていくのだから。



4. 新しいまちづくりへ向けて

通りの名前からイメージされるまちづくりプロジェクト

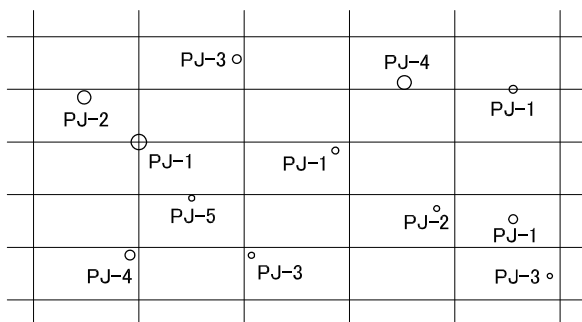
通りに名前が付けられ、人が生活する「空間」に具体的なイメージが付加される。そのイメージは人々に共有され、時代と共に変化していく。またそれは通りのポテンシャルや個性を反映するものになるだろう。

通り1つひとつが多様であることが明らかになる。同様に、まちづくりのプロジェクトも様々なものが企画されていこう。そうしたプロジェクトは通りの名前とあわせて人々にイメージし易いものになるはずだ。

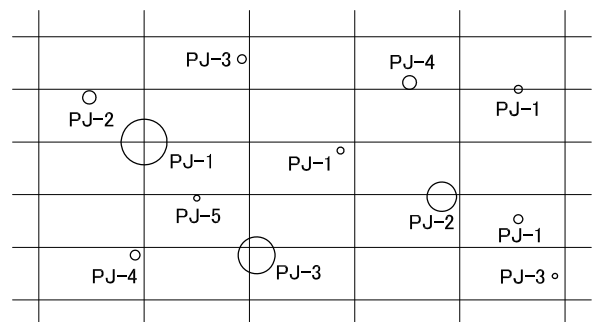
まちづくり=ひとづくり

著名なアーティストや音楽家を招待し、大きなイベントを開くことも重要ではある。しかし、それは唐突に行っても一過性のイベントになる可能性が高い。

まちづくりとは、そもそもひとづくりのためのプロジェクトではないのだろうか。私たちが住む町で人を育てること、それがまちづくりの本来の趣旨であるべきだ。人が育ち、人が人を呼ぶことでそれがまちづくりとなる。プロジェクトが大きくなることもあれば、小さくとも意味のあるプロジェクトもあるだろう（地図6）。第一に人を育てるということを念頭にまちづくりを考えたい。



地図2、小さなまちづくりプロジェクトのイメージ



地図6、小さなまちづくりプロジェクトに中規模、大規模なプロジェクトが加わっていく

まちづくりのベース=地図づくり

毎年、通りの名前が増え続ける。改めて付けられるそのユニークな名前は、海外に古くからあるものよりずっと楽しいものになるはずだ。町に変化が起これば、それに応じなければならないことはたくさんある。町の地図はその1つであり定期的に更新されなければならない。観光マップも変わるだろう。また、どんな情報を中心にとどのような地図をつくるのか。手描きの絵図からデジタル化されたものなど多様な地図のかたちが想像される。こうした地図は、あるまちづくりの成果とも言えるだろうし、これからのまちづくりの重要なベースとも言えるだろう。まちづくりのベースとは時代毎の地図づくりに集約しているのかもしれない。そう考えると、多様な地図は前述の公募の記録とあわせて、大切な郷土資料として町の図書館に保存されていくべきものである。

5. おわりに

まちづくりで将来を語り、まちの思い出話で過去を語る。その中にあるイメージや時間的繋がりは通りの名前があればよりうまく繋がっていくだろう。時間を要するプロジェクトだが、少しずつ積み重ねていくことで町の強いベースとなっていく。実現すれば日本では類を見ない個性的な町に発展していくのではないだろうか。その発展の過程を人と地図が語り継いでいく。

知らない町のバス停を降りると、通りの名前が目の前にある。「絵日記の道」。右を向くと「アサヒ横丁」、左を向くと「ひまわり小路」。

こんな町であれば地図を片手に歩きたくなくなってしまう。通りに名前を付けるというだけで、まだ見えない多くの副産物が隠されているのは間違いないだろう。

